

である。特に、野本將軍塚古墳は全長115mの巨大古墳で、その南方の沖積地は広大。古墳被葬者がこの地を治める権力者であったことがわかる。

中世城館は台地縁辺・道路沿いに立地していた。大蔵館は、都幾川沖積地と岩殿丘陵にはさまれた小台地上に造られた。東方には鎌倉街道が通っていた。野本氏館は、都幾川北方に將軍塚古墳を物見塚として建てられた。この西側を八王子道が走っている。菅谷館は、都幾川をはさんで大蔵館と向かい合った所に造った天険の城で、鎌倉街道が東に通っていた。また、青鳥城は崖下に泥湿地を見る、やはり天険の地で、道路がその北にあった。

中世に造立された板石塔婆は、その目的が追善供養と逆修作善であることから、寺社境内や道路沿い・小高い場所など目立つ所に存在している。

さて、上述のごとく、歴史的遺跡の立地条件がはっきりしたところで、当地域の特色を考えてみると、早くから開け、中世に最も発展したということが言える。近世以降、開発は停滞気味であるが、遺跡の保存のためにはそれは良い条件となっている。将来については、東松山駅（東武東上線）を中心とした地区に発展の可能性があるほか、ほとんど現在の状態を維持するものと思われる。また、埼玉県は当地域を中心として「比企歴史のむら整備構想」を推進している。

横浜駅周辺の商業及び購買活動の実態

杉山圭子

横浜市は、古くは港湾都市として港を中心に発展してきたが、高度経済成長期が去ると同時に貿易面での役割が薄れ、商業活動の中止は港（関内地区）から約8キロ離れた横浜駅周辺へと移動した。横浜駅は現在、鉄道7路線をはじめ、バス、自動車（都市内高速）といったさまざまな交通手段の結節点に形成されており、一日の通行量では市内他地域を格段の差で引き離している。

横浜駅周辺の商業地域の開発は、まず駅西口に始まった。昭和31年の駅名品街開設をはしりに、39年には地下街（ザ・ダイヤモンド）が開店。40年代中に現在ある商業集積6つ（百貨店2つを含む）の建設がすべて完了している。これに対し、東口の開発が本格的に始まったのは50年代のことだった。55年、専門店ビル「ルミネ」と地下街「ポルタ」が同時に開店し、東口の商業活動はようやく活気を得たのである。しかしその後も、東西口の来街者の比率は2対9と、依然西口が大差で優位にあった。ところが、60年9月末、東口奥に日本最大の売場面積を持つ百貨店「横浜そごう」が開店した。以後2ヶ月間で横浜駅周辺全体の集客数は約11万人（21.3%）増加し、東口への来街者数は20万人（81.8%）増えたと推定されている。

実地調査等より、この百貨店の開店には2つの

意味があったと考えられる。駅周辺の商業活動を活性化させる契機となったこと、及び、元来サービス施設に乏しい駅周辺に“サービス機能完備”を銘打った新しい百貨店の姿を提示したことである。

一般に百貨店の進出は、近隣の商店に打撃を与えるといわれるが、駅周辺の商業集積8つのうち、そごう出店後に販売額が低下したのは、規模と立地にハンディのある百貨店と、改装オープン前の「ルミネ」の2つで、低下率は双方とも5%以内にとどまった。逆に、そごうに隣接する「ポルタ」では、20%近く販売額が伸びている。東口への来街者数増加の恩恵を最も受けたといっていよい。なお、そごう開店1年後の東西口来街者比率は、2対5.5へと変化していた。そごう出店後の売上高減少は、かつての商業中心であった港周辺をはじめとする近辺の商業地域で、むしろ顕著なように思われた。ただし、駅周辺でも、人の流れが東口へ広がり始めた分、西口奥やわきへの人通りが減り、主要通りを外れた店では売上げが思わしくないようではあった。購買行動パターンが、従来の回遊型から東西往来（直線型）の動きに変化しつつあると判断できる。

ところで、こうした変化を招いた「横浜そごう」自身はというと、客足の伸びが利益の伸びに

結びつかないという問題を抱えているようだ。横浜そごうは、美術館をはじめとする様々なサービス施設を備えた百貨店として、その新しい形態は周囲の商店を啓発したが、最新・最大級という気負いが商品構成にも表れ、「高い」のイメージを消費者に植えつけてしまった。諸施設の金利負担の問題もある。消費支出全体に占めるサービス支出の割合が商品支出の割合を上回りつつある今日、このサービス機能と物販機能との調和は、とりわけ大型店にとって、今後の重要な課題となってくるであろう。

横浜市にとって「横浜そごう」の出店は、また現在進行中の「みなとみらい21」計画の第1段階であるという大きな意味を持つ。この計画は、各々ビジネス街と官庁街、あるいは商業地域と観光地域として機能が分離してしまった横浜駅周辺と関内（港付近）の2地域を結びつけ、横浜市の自主性を取り戻すことを目的としたものである。このことから、横浜駅周辺の商業地域の変容は「横浜そごう」の出店にとどまらず、今後は関内地区との競合も含めてさらに進んでゆくものと思われる。

横浜の日記による19世紀の気候復元

武 樋 智 子

1 研究の目的・方法

ヨーロッパでは16世紀後半から19世紀までは小氷期 (little ice age) と呼ばれ寒冷な時代であったということがわかっている。日本でも小氷期の存在が認められたことが各種の研究で指摘されている。

本論では、「関口日記」という横浜（生麦）で代々名主をつとめた家に残された日記を資料として用い、19世紀、約100年間の気候を復元することを目的とした。

日記の天気記録から、半旬別、月別の天気率を求め、年間推移、経年変化を示した。冬については、降雪率も求めた。また、日記中の災害記録と、関東地方で起きた気象災害の記録の検討を行った。以上のような方法で19世紀の気候を推定すると同時に、現在の気候との比較も行った。

2 要 約

(1)日記中、最後の5年間(1897~1901)については横浜地方気象台の観測記録が存在するため、これと比較検討を行った。その結果、日記中の晴天日は雲量八以下の日、降水日は日降水量1.0mm以上の日に、それぞれ近いことがわかった。

(2)半旬別天気率の年間推移から、1830年代以前はそれ以降より梅雨季が早かったと推定した。

(3)夏の降水率は、1840年代までと1850年代以降に差が認められた。すなわち、1840年代までは18

50年代以降より高降水、低晴天率の傾向がある。これを月別降水率の経年変化で見ると、1840年代までは7・8月に特に高降水、低晴天率である年が高頻度で現われることがわかった。暖候期の気象災害は、冷涼な夏を示唆する「冷夏」や「長雨」「異常低温」が1830年代に多発し、1870年代以降は見られない。また、「早ばつ」は1820年代と1960年代、1870年代に多発している。これらより、19世紀の夏は前半が冷涼多雨傾向、後半は前半より温暖な傾向にあったと考えられる。

(4)上述の気象災害が多発した年代のうち、1830年代と1870年代は特に夏の天気率に特徴がある。

(1830年代は冷夏が4回、1870年代は早ばつが3回それぞれ記録されている)1830年代の夏は、高降水・低晴天率、1870年代は逆に低降水・高晴天率の傾向がそれぞれ著しい。

(5)冬に関しては、雪日数、降雪率の経年変化によると、1850年代までとそれ以降に差が認められた。1850年代までに比べ、1860年代以降は低降雪率の年が多くなる。災害記録中の「大雪」「酷寒」の記録は、1850年代までのものがほとんどである。以上より、19世紀の冬は前半1850年代までが寒冷多雪、後半が温暖少雪の傾向にあったと考えられる。

(6)1850年代までについて、2・3月の風向を調査したところ、南風の吹き初めは現在の方が19世紀前半より早い傾向が見られた。また、早く南風